

図書館資料分類の研究

A Study of the Classification of Materials in Library.

清水 正 男

Masao Shimizu

— 目 次 —

- I 昭和初期わが国の整理法——その主観性
 - 一. 分類法・目録法の過主観性の指摘——世論的批判
 - 1. 御大典と図書館——文部省に望む——
 - 2. 図書館と実用
 - 3. 図書館見聞記
 - 4. 整理法（とくに分類・目録）の実情
 - 二. 当時の分類法への批判——図書館界
 - 三. 当時のわが国の分類法
- II 海外諸分類の研究・紹介と図書館界
 - 一. 当時の図書館界
 - 二. 諸分類法の研究
 - 1. 諸分類法の研究
 - 2. Richardson の分類法
 - 3. Sayers, W. C. Berwick
 - 4. Dewey の Decimal Classification D. D. C.
 - 5. 国際十進分類法 Classification Decimale Universelle C.D.U.
 - 6. Cutter の Expansive Classification 展開分類法 E. C.
 - 7. L. C., 議員図書館分類法
 - 8. S. C., Brown の Subject Classification
 - 9. 裘開明 ちゅうかいめい Chu Kaiming Alfred, 馬宗栄など
 - 10. Mann
 - 11. ボートン Borden
 - 三. 研究・紹介と分類標準化への道
- III わが国分類法の標準化
 - 一. Nippon Decimal Classification N. D. C.

- 二. N. D. C. 育成への L. Y. L. の努力
- 三. N. D. C. への協力と成果
- 四. N. D. C. に対する批判
 - 1. 国内における N. D. C. 批判
 - 2. N. D. C. に対する国外からの批判
 - 3. D. C. 側からの抗議に対する N. D. C. 側の回答
 - 4. 日本十進分類規定及び解説と N. D. C. の標準化

IV 図書館資料の整理——分類

I 昭和初期わが国の整理法——その過主観性

一、分類法・目録法の過主観性の指摘——世論的批判

明治期から大正年代を経て、昭和初期に至るわが国の図書館で使用していた整理法は、関係者の努力にもかかわらず、いかながら多くの批判にさらされ続けていた。そして、それが図書館の本質の究明と共に一気に爆発し顕在化したのが昭和のはじめ、昭和3年秋のことであった。

昭和の新しい時代を迎え国民の歓喜の中に御大典が持たれ、それを記念して多くの事業が成された。その中で文化国家への一大躍進を図ろうとした文部省は、わが国の図書館を倍增しようと決意したのであった。これは、まことに快挙と言うべきものであった。

しかし、この事業に対して世論は残念ながら厳しい対応を示し、図書館発展についての基本的な

指摘がなされている。その例として、(1)「御大典と図書館——文部省に望む」(大阪毎日新聞社説、昭3.11.1)、(2)「図書館と実用」(同大毎社説、昭3.12.3)、及び(3)「図書館見聞記」(土岐善麿)などが見られる。

1. 御大典と図書館——文部省に望む——

大阪毎日新聞社は社説(昭和3.11.1)に「御大典と図書館」を掲げ、文部省に対し希望を述べ、報道機関として従来余り見られなかった図書館論を展開している。すなわち、

「御大典の記念事業として全国いたるところに図書館が新設される。従来四千であった全国の図書館数が、今年一年の中に忽ち八千にのぼる。一躍倍加である」

と紹介している。しかしながらこの事業に対して若干の危惧の念を表明する。すなわち、

「今春来これら新設図書館の設立にあたる人々は既設のものをめぐり、経営者の意見を尋ね、かくあるべきもの、かくなさんとするものの設計図を速かに頭裏に描き上げようとした。しかし中には全く途方に暮れてしまった人々も少なくない。それほどわが国の図書館界の現状は混沌として捉えるにむづかしく、一種の迷路を形成していると言っても差支えないほどである。」

とし、わが国の図書館についての当時の状況を、混沌として捉え難く迷路状を示しているとしても、差支えないとさえ評している。しからばその迷路の打開はいかに可能であるかについても、

「何がゆえに、いかにして、どこに迷路が作られているのか、迷路の解剖と表示は数行の文字で言いつくすことは、もちろん至難であるが、大ざっぱにこれを見ると、指導者・経営者に人がないこと、数十年の因襲がもつれ合い、これを合理的にほぐし戻すことは今や至難で、すでに人力を超越しているか、或はまさに超越せんとしている。これらのために、現在の図書館は国民の生活とは交渉甚だ薄く、両者の間には大きな溝ができていること、しかして迷路はすなわちその溝の後方に横たわっているのが認められるのである。」

とする。国民の生活と図書館の間に溝があり、その溝の後方になお迷路が横たわっているとし、しかもその上迷路の解明も不可能であると断言す

る。わが国のこの実情は他の諸国と比較してどうであろうかについても、

「これを米国をはじめ欧洲諸国の実例に徴してみる。図書館は何れも国民の心的生活にとって、或は進んで物的生活においても大学に勝るとも劣らぬ教育機関として活躍しているのである。設備、分類、積極的活動、利用率、いずれもわが国の眠っているような図書館とは比較すべくもない。」

と、彼我の比較によりその間に大差のある点を指摘し、さらには、

「特にうらやましいのは、デューイ氏の十進分類法である。」

と、図書館資料の分類、特に分類法について言及する。しかもそれが欧米諸国でどのように使用されているか、またどのような効用が認められるのかについても、

「米国はもちろん、その他諸国の著名な図書館も、多くこの単一の分類法によっているがため、すべての書籍は、図書館を異にするも番号を全く同一にしている。従って各図書館は有無容易に相通じうるばかりでなく、読者は一瞬にして求めるものに行き当たり、いかなる新刊書もどの部門に入すべきかの疑惑がない。」

とし、デューイの十進分類法の使用により、便宜を受けている点をとり上げている。言外に標準化されたD.D.C.の効用を指摘している。これに対してわが国の実情はと言えば、

「我国図書館の病弊の一つはここでもある。欧米の例とは正反対に、各図書館とも独特にして、多くはむら気な分類法をもっている。」というのが実情であり、分類法がきわめて主観的である。従ってここに課題が存在するという点をとり上げている。したがって図書館資料の利用・活用がいかに影響されるかについても述べ、

「従って、いったん入庫された書籍は容易に利用者の手に届かない。従って利用されない。いかに有利に利用されるかよりも、いかに多くの蔵書を有するかが、今も各図書館の誇りで、従って死蔵である。が、死蔵された幾十巻よりも、活用される一巻が勝ること幾何であろう。」

と、図書資料の分類の主観性が図書死蔵という結果になりかねない点を率直に認めている。しかも、

「ところが、理窟はこの通り簡単にして著明でも、これらを実行に移すことは容易ではない。」

として、この事の困難性を指摘する。特に大規模で従業員の多い大図書館など万事好都合であると、一般は思われるであろうが実際の状況はどうであろうかと言え、

「蔵書幾十万の大図書館ほど、実用的に動員し、または根本から改造することは人力をこえる仕事となる。」

のが実態であるとの立場から、論を進めて、

「従って、毎日数十巻づゝ入庫される書物は、非合理的でむら気な分類法によって、大図書館の書庫のどこかの隅に積み上げられ、新分類名の上に新分類名が重ねられて、その間に何の連絡もない各群の図書は、恰も血管によって、繋がれていない無数のこぶの如く、既に合理的メスを拒むまでに病弊が進んでいるのである。」

と、わが国の図書館のもつところの分類面での不都合さをまず指摘し、これが合理的に解決される方途が、殆ど存在しないかのような見解が示されている。この事は重大である。とくに、一国の教育ひいては文化の進展を左右しかねない図書館実情についての、冷静なすどい観察であると言えよう。

「民衆が自発的に心を開拓するのは、図書館による外はない。そこにのみ国民的眞の文化の開花が期待される。しかもわが国図書館界の現状は以上の通りである。」

このためには、

「今や眞に書物を愛し併せて国民の心を知る偉大にして天才的な指導者が必要である。その人の出現なくしては、もはやすべてを建て直しがたいほどに、すべてが余りに混沌としている。」

とする。大きな希望を天才的指導者の出現に、その夢を託している。この時、文部省はどのような方針を持ち、指導を進めて行こうとしているであろうか。効果的な方策を待望しながら論をすすめる。

「文部省は、近く全国の優良図書館を表彰するという。何を良否の標準とするであろうか。また、^{にわか}俄に倍加せんとする各地の図書館に向つて、如何なる指導方針をもっているであろうか。」

とと問いかける。そしてさらに、

「数は図書と図書館においては多くを語らない。しからば、文部省の意図の中に、少なくともこの機会にわが国図書館事業の前途に向つて、なんらかの曙光を投げかける何物かの片鱗なりとも認めたいものである。」

と述べ、切角の御大典記念の大事業に対して、希望をまずかかげている。

2 図書館と実用

大阪毎日新聞社説——(昭3.12.3)に「図書館と実用」が掲載された。これは社説「御大典と図書館」から1ヶ月後であった。

この社説は、まず「西洋文化の輸入につれ、図書館・博物館・美術館なども、なくてはならぬものとして、方々に設けられるようになったけれども、西洋においては日常民衆によって盛んに利用され、その実生活とは、きり離すことのできない必要物となっている。」と実情を述べる。

これに反して「わが国では、まだ何となく文化的陳列棚の装飾物か、もしくは、一種の暇つぶしの娯楽機関に過ぎないように思われてならない。」としている。これでは文明の利器が多くの人々に利用され、「民衆一般の生活内容を豊富にし、カムフラブルなものにこれを民衆化する。」こととは縁の遠いものであると嘆く。

図書館については紙面を多くあて、多面的にこれが活用を図りつつある欧米の例をあげて、

「図書館なども、近時西洋では、だんだんと学問のための図書館から、実生活のための図書館に変化しつつある。即ち図書館の使命として、一部少数者の、高遠にして精到な学問の研究に従事する学者のためにも、役立たねばならぬことは無論であるが、それと同時にさらに、多数民衆の日常生活のために、実際の生きた役にたとうとしているのである。」

と図書館の実用化への動向を紹介する。そしてさらにニューヨーク市の公立図書館を例にとり、最近の傾向を具体的に述べる。

「近ごろ目にたつ現象は、実務関係者によっての利用の著しい増加である。読者の半分は、銀行家、輸出業者、店員、販売人、会計人等の、いわゆる実務家で、商業案内、政府報告書、入港税および関税規則、石炭や重油の積込場所、各地の市

況、生産の状態、外国為替、外国の労働状況等に関する書物や報告書が最も多く利用され」ていると、利用者の実情を述べている。

したがって、このような利用者のもつテーマ（題目）は、さまざまであるが、

「インドにガソリンを売りこむには、またサント・ドミンゴで砂糖を作るには、どうしたらいいかというようなことから、イランスヴァールの金鉱問題にまでおよんでいる。」

として、図書館利用の盛況を具体的に紹介し、市民の心に訴えようとしている。さらに、館内の各所、各室の利用の状況をも、ごく簡略ではあるが案内し、その実情を知らしめようとする。

「その美術室でも、もはやただ芸術のための芸術の殿堂ではなく、宝石商や、織物図案家などが、毎日おしかけては、スペイン人の着物の模様とか、室内装飾とか、現代ドイツやフランスの家具類とかを研究する場所になっている。」

と紹介し、さらに「地図室には、動産商人、航海業者、技師、広告業者、大洋横断飛行家などが、また二十ヶ国以上の特許登録が全部ファイルされている。」と述べ、さらに、

「化学技術室には、発明家や特許辯理士などがつめかけている。また一定の日を開く読者会議には館員も出席して、いろいろ読者の質問に答えることになっている。」

このような図書館利用の状況からして、「1年の入館者は全体を通じて、四百万人にのぼるということである。ことに最近の施設として、最も歓迎されているのは、複写カメラの利用である。これは他のいずれの複写機よりも、迅速にしてかつ正確であるというので、数字の複写を必要とする統計家、音譜の複写を必要とする音楽家などには、殊のほか重宝がられ、政府の報告書類を、なるべく早く手に入れようとする銀行・会社の需要も極めて多く、15年前ごろには複写の需要1ヶ年500通に過ぎなかったのが、複写カメラの使用以来、俄かに増加し、昨年のごときは9万80通以上にも及んだ。」

とその盛況を報じている。さて以上のような状況に比較して、わが国の実情はどうであるかを反省し、わが国の図書館事業についての再考察の要を述べ、

「このような民衆的利用率、または積極的活動に比較すると、わが国の図書館のごときは、まるで眠っているのも同様である。いかにその数が多く、その蔵書が多くとも、これでは民衆の実生活とは、何の交渉もない。しかも、いかにしてその施設を実用的にし、自発的に自己の心を開拓してゆこうとする民衆を、積極的にひきつけ、利用させようかというような新工夫に至っては、てんで念頭にないらしい。」

と実情を述べて、民衆に対しての魅力ある経営を訴えている。そしてさらに、

「こんな状態では、御大典記念の図書館がいかに増加しても、その各々の蔵書の数がいかに増加しても一般文化の向上には、全然無意義であろう。モリソン文庫や、ゾンバルト・コレクションの保有も、結構なことには相違ないが、図書館と民衆の実生活とを、いかにして結びつけるかも、時代の切なる要求でなければならぬ。わが国の図書館事業も、更始一新の岐路に臨んでいるのである。」

としている。11月3日の社説の内容を、一步進め、かつ具体的に記述し、ひろく世の蒙をひらこうと呼びかけている。

3. 図書館見聞記

土岐善麿の「図書館見聞記」が、東京朝日発行読書標第26号（昭3.11）に掲載された。東朝調査部長であり、同社の図書館の主宰をしている氏の見聞記である。したがって、図書館のユーザーとしての立場と、また図書館関係者としての見解とを加味していると見られる。

「最近参考に調べたいことがあって、ある公立図書館へ行って……受付の人に、こういう種類のものを見たいのですが、と言ったら、カードをおしらべになりましたかと言う。僕は恐縮して、カードは僕には難物なので……と言ったら、先方も苦笑して、そして快く種々な便宜をはかってくれた。」

と書き出し、カード検索について、

「図書館へ行って、カードが難物だなどといえた義理ではない。カードで調べるのが一番早道なわけだが、どうもこれが僕には不向きで閉口する。毎日、勤め先の書庫へは自由にはいれるので、調べたいことがあればすぐそこにはいり込んで、直

接書物にある。必要なものを、手あたりまかせに引き出してくる。」

とカードによる検索が困難である点を、あらかじめ紹介する。今日からすれば、当然困難な事情が明確に存在しているわけであるが。

「もっとも僕の属する書庫にあっても、書物の整理上、カードは作ってあるが、カードの検索ということは、よほど技能を要することで、一日がかり、半日がかりで、カードのひきだしばかりひっくり返して、それだけに疲労困憊して、実物には遂に逢えずにしまうことが一再ではない。」

と実情を訴えている。しからば、なぜ検索が困難であり、よほどの技能がないとならないのか、ひき出しばかりひっくり返すのであろうか。これについて、

「カードの検索上一つの障害というべきは、公立図書館の間に、このカードの様式が一定しないことだ。国立図書館としての上野は、なにしろ日本で出版される書物という書物が、ことごとく収納されている性質上、カードの様式も、おのずから別種のものとなることは当然だが、その他のすべての公共図書館が、皆およそこの国立図書館にならって、公民教育という目的の簡易であるべき使命にそわないようになっている事情はないか。しかも更に、これらの公共図書館がまた、各自各様の様式をとって、その間にほとんどなんらの連絡がない。」

と公共図書館の間に、カードの様式が一定しない。上野の（国立）図書館の様式が、自ら別種のものとなることは当然であろうが、その他の公共図書館は各館各種の様式である。

「そのために、一つの図書館へ行きつけたものはいいいとして、第二、第三と調べ物のためにゆきまわる必要の起った場合、カードの検索からしてまず考究なくては、希望の書物にゆき当たらないようなことがある。読書子の能率上、まことに遺憾なことと言わなければならない。これがひいて一国の文化の進展上、どれほどの損失となるかは論ずるまでもないであろう。」

と図書館で使用するカードの様式の、主観化がいかに不都合・不合理であるかを訴え、これが一国の文化の進展に悪影響を与える点を指摘している。

この件については、図書館関係者の会合でも、しばしば問題化する。しかしながら、委員付託ぐらゐの扱いとなってしまう。この実情は、嘆かわしいものであるとする。

「カードの統一ということは、是非もっと具体的な考究問題として一刻も早く解決してもらはなければならない。」

としている。その上に、米国の図書館におけるこの間の事情を紹介し、かつわが国で実施可能な策を述べている。

「アメリカなどでは、書物が出版される度に、各種必要なカードが統一的に作製され、それがそれぞれの図書館に供給されるから、係員は、それをカード箱に整理すればいいことになっている。従って、各地方の図書館が皆同一の様式によって、同一の書物を分類することになるという話だが、日本では、そこまで進まないまでも、図書館当事者の間の連絡によって、幾分は統一のいとぐちが得られるかと思うのだ。」

としている。

4. 整理法（とくに分類・目録）の実情

上記の3例は、わが国の図書館事情をよく表現して、多く訴えている。中でも、わが国の図書館で実施された、図書館資料の整理法について、当時の事情を具体的にしかも理解し易く記述している。

大毎社説の「御大典と図書館」にあっては、とくに分類法について述べ、米国をはじめ欧米における図書館は、等しくデューイ Mevil Dewey の十進分類法(D.D.C.)を使用し、しかもこの標準化された D.D.C. により統一されて、図書館資料が好都合に整理されている点が紹介されている。

これにひきかえて、わが国での図書館では、それぞれの図書館がそれぞれに都合のよい分類法をいわば勝手に使用している。そのために、全国図書館で、資料整理は全く雑然たる状況を呈していて、手の施しようもない実情であると訴えている。

欧米が、D.D.C. という標準化された分類により、好都合に整理されているのに比較して、わが国の分類が全く標準化に縁遠く、主観的な分類によって気ままに整理されているのが、その大きな要因である。

この事情が、彼我の図書館の機能に影響し、かつ図書館の効用にも、甚大にかかわっているという点を指摘する。

同大毎社説の「図書館と実用」は、欧米での実情につき、図書館を市民の生活に密接に関連させて、みごとに実用化している状況を、例をあげて詳しく記述している。

わが国は、欧米のこのような実情に比較して、遥かに見劣りがする。まるで眠ってでもいるかのような図書館活動の実態であるとし、魅力のある図書館経営を強く希望する。御大典記念に図書館数の増加等を徒らに図ることよりも、図書館を民衆の実生活と密接に関連するものにするような試みこそ大切で、その方向へ進むように強く希望している。

このことは、その裏には、勿論、既述の図書館資料整理を、言外に前提とする。利用し易い図書館を考えていることは言うまでもない点である。

以上の両社説はともに大毎のものであり、両者の間には約1ヶ月の時間の差を見るが、内容は既述の通り相互に補完し合うものである。「御大典と図書館」（社説）中の「現在の図書館は国民の生活とは交渉甚だ薄く、両者の間には大きな溝」が存在すること、及び「しかして迷路は、すなわちその溝の後方に横わっている……」とする点は、この間の事情をよく説明するものと言えよう。

土岐善麿の「図書館見聞記」は、図書館を常時活用する立場から、また図書館関係者としての、率直な見聞記である。特に、カードによって、図書館資料の検索並びに利用をする身として、当時の図書館の、とくに目録カードの改善につき、遠慮がちなが図書館員の自覚にまつと述べている。この点は特に注目したい。

カード目録の主観性が、わが国の図書館実情であり、そのことが欧米の図書館事情と大きく異っていることから、土岐善麿の「カードは難物」という表現も出て来るわけである。しかも、目録をもっともっと客観化するために、標準化すべきであるとの声もあがるわけである。しかしその声があがるものの、いつの間にか時の流れに消えていく点の指摘など興味ある点である。と同時に当時の館介の泥沼化した様相が思いやられる。

以上、三論文から、当時のわが国の図書館が、

欧米の状況に比較して、遥かに後進的であった点が知られる。しかも、その状況は、手に負えぬもの、望みなきものでさえあると評される。

中でも、とくに分類や目録などの、標準化が全く見られず、過主観的分類や目録がまかり通っている事情が詳しく述べられている。

これが、大毎をして「今や真に書物を愛し、併せて国民の心を知る、偉大にして天才的な指導者が必要」と言わしめたものであろう。このような指導者の出現がなくしては、すべてを建て直しがたいほど余りにも混沌としていたというのが、昭和初期の実情であった。そして、その時期に、御大典記念行事が展開されようとしていたのである。

世論は、図書館数も大切であるが、図書館の質の向上を含めて、わが国図書館界の徹底的な、反省と革新を希望していたものと言えるであろう。

二、当時の分類法についての批判

——図書館界

世論的批判は、図書館資料整理その中でも特に分類や目録などの主観性が、わが国にあっては余りにも顕著である。そのために、図書館利用の低迷化、図書館の発展過程における量的・資的両面にわたる遅進性も見られる。しかもこれらは極限に近いと警告されている。

そして、その結果、図書館の奉仕的機能、とくに分類法や目録法などの抜本的改革による客観性の付与と、天才的指導者の出現への期待が叫ばれている。

元来、図書分類について、Hulme は「図書館に含まれたる知識を発見するための機械的時間節約法」であると言っている。また Sayers も、人生と分類の効用を、“A manual of classification for Librarians & bibliographers”の中で関連づけ、「人生は分類を軽視するにはあまりに短かすぎる」とさえ言い切っている。

せっかく期待して、図書館を訪れてくるユーザーに対して、図書館を生涯ずっと愛好してくれる利用者になって貰えるか、それとも図書館とまるで無縁の人に追いやってしまうか、その岐路に立つ重要因子として、資料整理とくに分類法などが問題となる。いわば図書館利用の初歩的段階の状

況を左右する大切な関門として、これを位置づけることができると言えよう。このような点からすれば当時の実情は慨嘆すべきものであったと言えよう。

このような事情のもとで、分類や目録法等の研究に造詣の深い加藤宗厚は、その当時、わが国の分類法について所論を発表している。即ち昭和3年、青年図書館員聯盟(L.Y.L.)機関誌「^{としやかん}園研究」に、「図書館研究第一号を祝る」(Vol.1 pp.228-235)をよせている。

その中で、「我が国ニオイテハ未ダ後進ノ図書館ヲ指導スベキ標準分類表ハナイ。読者ハ大イニ之ヲ受ケテ日本図書館協会ノ議題トシテ盛ンニ分類表ノ統一ガ叫バレテイル、然シナガラコレハ恐ラク不可能事デアラウ」と当時の図書館界の実情を述べる。

さればと言って、分類表の標準化は安易になされるべきではない。わけでも、図書館の同業者間の話し合いなどで、分類の標準化など図られるべきではない点を強調している。

デューイの十進分類法のD.C.やカッターの展開分類法のE.C.、議会図書館分類法L.C.などの、今日の盛況が見られるのは、決して数図書館の協定ではない。D.C.、E.C.、L.C.など、それぞれの発案者達の努力によって、この事が成ったものとして、「其ノ使用ハ強制デハナクテ、興望、発現デアル」べきであると説く。そして、遺憾な事には「我国ニハ自他共ニ許スD.C.モナク、E.C.モナク、L.C.モナイ」と結論づけている。

標準分類法の制定は、実は強制ではなく、自ら愛され利用される、質的に高度なものであるべきである。しかも、その実現には、相当な困難性が伴うものであると指摘している。図書館が奉仕機関として把握すべき奉仕機能の、質的發展に対して、もう一つ敏感ではなかったところの、昭和初期頃の関係者としては、格調高い卓見であると言える。

^{すずきまさち}鈴木賢祐と共に、L.Y.L.のいわゆる三大 tool (即ちN.D.C.、N.C.R.、N.S.H.など)の完成について、その理論的な基礎づけに功績のあった、すぐれた会員の面目が躍如として示されている。

三、当時のわが国の分類法

わが国での、近代図書館にあっては、初期の図書分類法は、分類目録のためにつくられたものであった。そして分類としては、帝国図書館の八門分類表がまずあげられる。即ち、

I 神学・宗教、II 哲学・教育、III 文学・語学、IV 歴史・伝記・地誌、V 政治・法律・経済・社会、VI 数学・理学・医学、VII 工学・兵学・美術・諸芸・産業、VIII 事彙・類書・叢書、等となっている。

一方、十進記号をもつ書架分類表のはしりは、湯浅吉郎による京都府図書館の分類法(明治31年)である。即ち、000 叢書・辞書、100 哲学・教育、200 宗教・神道、300 社会・産業、400 法政・経済、500 理学・工学、600 医学・衛生、700 美術・工芸、800 文学・語学、900 歴史・地誌、等々である。

さらに、後の公共図書に影響を与えたものに、佐野友三郎の手になる山口図書館の分類表がある。000 総記、100 哲学・宗教、200 教育、300 文学・語学、400 歴史・伝記・地誌、500 政治・法律・経済・社会、600 数学・理学・医学、700 工学・兵学、800 美術・諸芸、900 産業、等となっている。

この特徴が、帝国図書館の八門分類表を基礎とし、これに十進記号を加えたものとされる。このことは、両表の対照によっても明瞭である。

当分類については、その百区分が、一応県立図書館長協議会で、1919年に、公共図書館の標準分類表に指定されたのであった。しかしその後開設された府県立市立図書館は、それぞれこれによらず、各館独自の分類法をつくって使用した。したがって予期したような分類表利用の達成は無理であったようである。

以上から知られるように多種多様な分類法によって、それぞれの図書館運営が図られて居った。そのため標準化された分類がまだその誕生を見ていなかったのである。このことは、図書館のユーザーを慨嘆させるに充分なものであった。既述の大毎社説に適確に表現されていたような世論の批判的実情も、このような図書館事情から招来されたものとも言えよう。

このような実情は、実は多くの分類法について

それ等を研究しようとする気風を生むのに好都合となった。海外からは、D.C.をはじめ、E.C.、L.C.など多くの分類法が紹介されている。この紹介の盛況は、結果的には社会教育・学校教育の両面で、図書館が見直されたこと、並びにその存在の認識が高められつつあった点を示すものでもあった。

明治中葉以来、大日本教育会をはじめ、各道府県の教育会にそれぞれの附属図書館が設置されたこと、そしてそれらが各道府県での中央図書館のような有力な公共図書館へと発展する気運などを生み、明治末から昭和初期にかけこの事情が顕著である。近代的な公共図書館を得ることが出来るようになった事情を示しているものである。

わが国の府県立図書館創設には当時、大きく三つの契機が典型的に見られる。それは、(1)皇室に関する記念事業、(2)教育会中心に創設が推進される。(3)教育会がつくった図書館を基礎とするもの、等である。

基本的に地方の図書館例としての、長野県立図書館の場合を見よう。当館の場合には上記の(1)(2)(3)の諸条件を兼備する。即ち明治23年「信濃教育会ニ書籍館ヲ創立スルノ件」が提案され、同25年6月24日信濃教育会図書館、同40年6月15日信濃図書館開館を経て、昭和3年9月長野県立図書館の設立を見た。これらは、終始信濃教育会の協力がその背景となっている。この長野県立図書館と信濃教育会との関係の例は、全国各地の公共図書館設立に見られるものである。これは、図書館事業への関心の高揚が、全国各地に見られたその契機づくりの原因となったものであると言えられよう。

II 海外諸分類の研究 ・紹介と図書館界

一、当時の図書館界

大正12年の関東大地震により、わが国の東京を中心とした関東方面の図書館界は大被害を蒙ってしまった。館界の中核はとりあえずその中心を関西方面に移動せざるをえなかった。そして、大阪が

その新しい中心的役割をはたすに至った。

幸運にも内外の大規模な援助を得て、関東は急速な復興を果たした。そのためまた東京に復帰することを得た我が国の図書館界は、再び活動を開始したのであった。この大きな災害は、結果的には関西及び関東を中心とする、双方の図書館界の発展に対し時ならない大きな刺激的契機となったと言えよう。

特に、当時の対図書館界の世論の批判に対して図書館の実務に当たっていた関係当事者の心中は、察するに余りあるものであった。日本図書館協会をはじめ、各種の協議会などが、これを敲肅に受けとめたことは言うまでもない。特に、若い図書館従事者の反応も、また見るべきものがあつた。

大阪を中心とし、全国各地に会員をもつ青年図書館員聯盟L.Y.L.は、既述したような手きびしい批判の渦巻く中で誕生したのであった。その結成が昭和2年、その後約20年に及ぶ活動が開始された。L.Y.L.創立の事情、ならびにその活動の概要については、筆者が既に(S 44)「読書科学」に詳細に論述しているところである。

L.Y.L.が先導役を勤めてのわが国の若い図書館員の努力は図書館界の面目を、一新するものであった。注目されてよい点である。これはわが国の図書館学の発展史上にも、大きな足跡を残したものであると言えよう。

特に、図書館資料整理に対して、中でも資料整理 tool の開発について、大きな功績が認められよう。そしてその中でも、分類法の標準化による日本十進分類法の開発、さらには目録法、件名標目表についての同様な努力と成果は、大きく注目される。

その中で、分類法については最初の成功であるだけに、その意義も特に大きいものと言えよう。

二、諸分類法の研究

1. 諸分類法の研究

海外における諸分類法は熱意を以て研究され、結果は詳細に発表された。このことは、新しい分類法の誕生に対してはもち論、その法を育成して標準分類法を発展させるにも、大きな便益が与えられたことをも意味するものである。

Richardson の分類法をはじめ、Sayers, W. C. Berwick、Dewey の十進分類法 Decimal Classification D.D.C.、国際十進分類法 Classification decimal universelle C.D.U.、Cutter の展開分類法・Expansive Classification E. C.、議員図書館分類法 L.C.、Brown の Subject Classification S.C. につづいて裘開明 Chiu Kaiming Alfred、Mann、Borden などの分類法の研究・紹介等々、幅広くしかも徹底的な検討が、当時の年若い図書館員の手により、中でも L.Y.L. の会員などが中心となってすすめられる結果となった。

2. Richardson の分類法

Ernest Cushing Richardson の「Classification³ Theoretical and Practical を、「分類法ノ理論及実際」として、加藤宗厚が L.Y.L. 機関誌「圀研究」(Vol. 1) にとり上げている。とくに理論分類と図書分類の相違を明らかにしようと試みている。

第一部では科学の順序 The order of the sciences, 第二部では図書の分類法 The Classification of books を述べ、学の順序、図書の分類での類順序の問題を重視している。即ち図書の分類は科学の順序とは逆で、事物の順序を追究する人の心の過程、すなわち一般から特殊へと、包含性の大きいものから小さいものへと及ぶべきであるとする。

当時図書館学の分野では、当書は必読書であるとされ、Sayers も最も権威ある書と評した。この書はしかも 1900 ~ 1901 にわたる The New York State Library School Association Alumni Lectures での講義案の集録になる著書であったのである。

Richardson の「Classification - 1876 - 1926, Library Journal Vol. 51, No. 21. を鈴木賢祐が、「分類ノ過去五十年」としてとり上げている。Richardson はこの中で、過去 50 年は分類理論発展の歴史ではなくて、むしろ応用進歩の歴史であると位置づけているのである。

3. Sayers, W. C. Berwick

Richardson と同様に Sayers も、L.Y.L. では甚だ重要視して研究を進めたものである。Sayers については、An introduction to library classification

1918. の巻尾にある英国図書館協会の、図書館員検定試験の分類法に関する問題を取りあげて、加藤宗厚が、「分類法ノ問題」を圀研究 Vol. 2 にとり上げている。

さらに加藤宗厚は、「分類学ト議院図書館分類法」の中で、Sayers の分類学の業績である、「The grammar of classification 1908. A short course in practical classification 1913. Canons of classification 1915. An introduction to library classification 1918. A manual of classification 1926.」などにふれている。そして「議院図書館分類法 A manual of classification for librarians & bibliographers, 1926.」について詳細に論じている。

Sayers の分類概論についても、加藤宗厚は研究成果を、「分類概論」(Vol. 4)をはじめ、「分類概論下Ⅱ」(Vol. 4)、「分類概論下Ⅲ」(Vol. 5)、「分類概論下Ⅳ」(Vol. 5)、「分類概論下Ⅴ」(Vol. 5)、「分類概論下Ⅵ」(Vol. 6)、「分類概論下Ⅶ」(Vol. 6)などを、「圀研究」に発表している。

鈴木賢祐も、Sayers の“A manual of Classification for librarians & bibliographers 1926”の第 3 部である分類の実際作業を、「分類の実際作業上」(Vol. 3)「分類ノ実際作業下」(Vol. 3)として、さらに同書 Ch. XXVIII を「図書館管理の分類」(Vol. 3)として発表している。

Sayers は分類の理論的原則をまず規定し、つぎに Richardson に従い図書分類は知識の分類に準拠すべきであることを述べ、図書の具体性に鑑み、且つその適用を容易ならしめる条件を論ずる。そしてこの原理により近代図書館分類の分析を試みたのであった。彼が分類の規準として揚げたのは、まず、一般規則 7 条名辞関係 2、総類及び形式細目関係 1、記号及び索引関係 4 の計 14 条であった。

4. Dewey の Decimal Classification, D.D.C.

メビル・デューイの Decimal Classification, D.D.C. は、図書分類史上不朽の名を残すものであるとされる。

デューイが彼の D.C. づくりに参考としたのは、St. Louis Public Library の Harris の分類と、N.

Y. Apprentice Library の Schwarz の Harris の分類である、と彼は述べている。この点から、D. C. は Harris を通じて Bacon の学の分類に関与している点が知られよう。

間宮不二雄は、「M. Dewey 十進分類法ノ説明ト導言上」(図研究 Vol. 3)「同中」(全 Vol. 3)、「同下」(全 Vol. 3)として、「M. Dewey 十進分類法の説明と導言附 W. S. Bisco 年代記号法及 CR. Olin 図書記号法」を訳出している。

さらに、間言は“Dr. Meril Dewey & his Decimal Classification. Influenced upon Nipponese Libraries. June. 1932. by Mamiya Fujio”(デューイ博士ト彼ノ十進分類法ガ日本図書館界ニ及ボシタ影響)を发表(図研究 Vol. 6)している。その中には、わが国の図書館に対する Dewey の影響及び日本語による D. C. 分類関係参考文献15等の掲載がなされている。

さらに、鈴木賢祐は論文「D. C. 第十二版」(図研究 Vol. 2)をも発表している。Henry Bertlett Van Hoesen の、“The Twelfth Edition of the Dewey Decimal Classification. Library Journal 53. 1027 - 1030. Dec. 1928”を原本としたものである。

デューイの D. C. が、極めて優れたものであったのは、彼の分類に対する見識が他に比を見ないものである点を指摘出来よう。デューイによれば、彼自身分類には理論的一貫性を目的としなかったという。余りに理論的に計画されたものは、かえって完全なる理解を困難にし、応用しても千人中ようやく一人が、実際に駆使することができくらいであろうとしている。実はこの辺に特色を見るが、同時に Dewey の D. C. に弱点があるのではないかとされるのもこの辺に原因があるであろう。

D. C. については多くの長所が認められよう。例えば、①表が単純であるので、理解・記憶・使用に便利。②伸縮性に富み、図書館の性質により粗表・精表のいずれを使用しても綱で一致。③経験に即した名辞。④助記性に富む。⑤無限の展開に耐えうる。⑥不断に成長。⑦記号が単純で国際的。記録し易く、記憶し易い。⑧相関索引をもつ。⑨多くの図書館、文献分類に使用される。等々多くの点が挙げられよう。

しかしながら、反面、機械的で人為的、非論理的、区分の不均合、欧米本位的、学問の分類上旧式で名辞が古い。重要な新主題挿入の余地がない。分類番号が長い。等々の短所の指摘も出来るであろう。

5. 国際十進分類法 Classification Decimal Universelle C. D. U.

Classification decimal universelle. C.D.U. 国際十進分類法を、武田虎之助が紹介し、「本邦業界ニ於ケル既刊分類表ニ対スル定説ハ、海外版ノモノハ、D.C.、L.C.、E.C.、S.C. ……国内デハ N.D.C. ヲ支援スル者ガ多イ」、しかし「C.D.U. ノ全貌ハマダ描キ出サレテイナイ」として、C. D.U. の現況紹介から解説に入っている。

1895年、ベルギーのブラッセルで、全世界の書誌的資料関係で国際会議がもたれた。そこで国際書誌学会・国際書誌学局が設立され、全世界の図書・文書の目録づくりのためには詳細な分類表が必要となった。しかもそれは、①十進分類法であること。②アラビア数字で本法類番号が作成されていること。③十進法の原理の無限大に拡大可能。等々の理由により選ばれた Dewey の D. C. が採用と決定したのであった。

このような事情のもとに出来上がったのが、C.D.U. である。科学論文の詳細な索引、及び排列上の有用性が認められて行った。C.D.U. は 1929 年には 42ヶ所でしかも 10,000の機関に於て使用された。わが国では当時、台北帝国大学図書館などで使用(武田虎之助の勤務校)されていた。アカデミックな研究には不可欠なものであった。

6. Cutter の Expansive Classification 展開分類法 E. C.

Cutter の“The Expansive classification By Charles Ammi Cutter (Transactions and proceedings of the Second International Library Conference, held in London, July 13 - 16, 1897. London 1898 - PP84~88 抄録)が、「カッター著展開分類法説明」として鈴木賢祐によって紹介されている。

図書分類法一般を研究するものの、是非一読せねばならない……殆んどすべての代表的な文献

に……引用されていると、L.Y.L.の「圖研究」(Vol. 4) 紹介する。元来、E.C.の「Expansive」とは、知識の全ての分野を含む別々の表が、第1表から順次発表するように構成されている事をあらわすものである。

第1部は、第1表及至第6表から成り、第2部は第7表からなる。この表は Cutter 自身が、類の排列につき理由を明らかにし、一般に主題の進化の線に沿って排列されている。

これは最も理論的な分類法であると評せられているものである。本表記号は、A. General Works, B. Philosophy, Br. Religion, E. Historical Sciences, H. Social sciences, L. Sciences and arts, R. Useful arts, V. Recreative arts (W. Fine arts), X. Language, Y. Literature. などである。

本表に対しては、多くの長所・短所が挙げられよう。論理的、学究的、各科排列近代的、図書館の実際に立脚、助記性、無限の展開に堪える、一国関係の主題が一ヶ所に集め得る、記号が単純などの長所が認められる。このために、わが国ではこの E.C. が高く評価されていたのであった。

反面、E.C.に対して、未完成であるとか、区分が不均合であり記号が記録・記憶・排架などに困難である、等々の短所もあげられた。とくに、記号の件についての指摘は、E.C.をそのまま採用することに対して大きな欠であり、一種の警告とも言えるほどであった。

7. L. C. 議員図書館分類法

加藤宗厚は、「Sayors分類学ト議員團分類法」(「圖研究 Vol. 4」)を訳述している。「議員図書館分類法 A manual of classification for librarians & bibliographers Ch. XVI」の中で、(a)図書館ト其ノ分類法、(b)本表ノ簡單ナル説明、(c)批評及評価、などを紹介している。

L.C.は、増訂が可能のため表は最新式で、各類の分冊発行や、廉価で入手できる点、印刷カードの印刷に好都合などのため、公共図書館・学校図書館でよく利用されていた。

8. S. C. Brown の Subject Classification

四大分類表(D.C.、E.C.、L.C.、S.C.)中、最後に現われた S.C.は、英国近代図書館の父と

も称せられる James Duff Brown (1862 - 1914) によって成った。

鈴木賢祐は、「Library classification and Cataloguing 1912 Ch. II」を「分類ト目録作成」(「圖研究 Vol. 3」)として紹介している。

9. Chiu Kaiming Alfred 裘開明、馬宗栄など

Chiu Kaiming の「Classification in China. Library Journal, '52 : 409~417. 1977」が、鈴木賢祐により、「支那ニオケル分類法」(「圖研究 Vol. 1」)として紹介されている。

^{ちゅうかいめい}裘開明の「Harvard 大学「漢和文庫」分類表」と共に、わが国での漢籍の取り扱いについての示唆が与えられた。

彼は、漢和文庫分類表の中で、分類総目を、經学類(100 - 999)、哲学・宗教類(1000 - 1999)、史地類(2000 - 2999)、社会科学類(4000 - 4999)、言語・文学類(5000 - 5999)、美術類(6000 - 6999)、自然科学類(7000 - 7999)、農林工芸類(8000 - 8999)、叢書・目録類(9000 - 9999)とする。

馬宗栄 Ma Tung Jung (L.Y.L. 会員東京帝大卒)は「中華民國清華学校旧籍五部分類法」(「圖研究 Vol. 2」)を発表、分類を、經部、史部、学部、集部、叢書部とする。

10. Mann

山口三郎は、Margret Mann を研究し、「Introduction to Cataloging and the classification of books Ch. II」をもとにして、「図書館目録編纂及圖書分類概論」(「圖研究 Vol. 5」)を発表した。

11. ボードン Borden

Borden の「Borden, William Alanson : Outlines of a scheme of Classification : A plan founded on the Decimal Classification and to be used in connection with it. Library Journal, vol. 53. 127 - 128. Feb. 1. 1928.」は、鈴木賢祐によって訳述され、「東洋及ビ其ノ他ノ國ニ使用スベキ分類表ノ梗概——十進分類法ヲ根拠トシ同法ト關聯シテ使用スベキ方案——」として発表(「圖研究 Vol. 1」)された。

その中で、「東洋人ハ新図書館精神ニ目醒メツツアルノダカラ彼ラノタメニ、ワガ至上ノアメリ

カノ分類法ノミナラズ、彼等の要求ニビッタリト
当テ箴マルヨウニ改修サレタモノヲ、準備シテヤ
ラネバ可愛ソウ」としている。

この事については、L.Y.L. の Bulletin で、L.
Y.L. の幻燈会開会の辞の中で、鈴木賢祐は、
「William Alanson Borden Library
Journal の本年2月1日号に書いてある「『東洋
及ビソノ他ノ国ニ適用スベキ分類表ノ概概』トイ
ウ文ノ中ニ、『準備シテヤラネバ可愛ソウダ』ト
イウノデアリマス。私ハコレヲヨンデ少カラズ類
ニ触リマシタ。……『偉ソウナ事ヲイイナサン
ナ、日本ニハコソ立派ナ分類表ガアルノダゾ』
ト Borden 氏ノ前ニ叩キツケラレルヨウナモノハ、
今ノトコロ残念ナガラ日本ニモナイノダカラ」と
述べて残念がっている。

鈴木賢祐の、「Dewey 十進分類法ト Borden 案
——特ニ日本國ノ立場カラ——」（『図研究 Vol. 1』）
は、アルファベットを D.C. に組み合わせる事を広
義のボードン案と見なして、Borden 案を、「ワガ
国在来ノ十進記号表ノ短所ヲ補イ、D.C. ヲ日本的
ニ駆使シウル方案」と評している。

三、研究・紹介と分類法標準化への道

以上、当時の図書館関係者による、各種分類表
の研究とその成果を見た。これらは、この後の日
本十進分類 N.D.C. の案出・提示さらに育成に対
してまで、重要な契機を与えている。この点は特
に指摘されなければならない点であろう。

わが国の分類法の標準化への動きは、さきに指
摘した世論の厳しい批判と相まって、大きく前進
させられたこと、ならびに L.Y.L. の結成、及び
比較的少壮の図書館員による研究・実践が華々し
く展開されたこと等からも、容易に理解しえられ
るところと言えよう。

もち論、この気運は、さらに目録法や件名標目
表の標準化をも促し、ますます気鋭の青年館員の
活躍が展開されるに至ったのであるが。

以上のべたような、各分類表研究状況下にあっ
て、わが国の図書館やユーザーに対して好適な分
類表の出現に対する期待感が、ますます高揚され
て行ったのであった。

この様な状況下であって、海外での図書館学の

研究に便ずる諸資料や、それらを活用する研究者
ならびに実践者などが、気らくに集合し研究し合
える場、半ばアカデミック、なかばサロンの気風
を持った場の設定もようやく実現したことから、
上述の動向は増幅されて行ったのであった。

Ⅲ わが国における 分類法の標準化

一、Nippon Decimal Classification N. D. C.

好適な分類法出現への期待の中に、森清の「和
漢図書共用十進分類表案」が発表（『図研究 Vol. 1.
PP 121 - 』）された。森清は、現代のわが国の図書
館界で、ただちにとりかからなければならない急
務とすることは多々ある。しかしその中で重要な
ことは何であるかを指摘し、分類法は「我国ノ立
場カラ立案シ然モ共通的ニ使用シ得ル標準図書分
類法」でなければならない事をあげている。（『図
研究 Vol. 1』）

森清の、「和漢図書共用十進分類表案」（『図研
究 Vol. 1. PP. 121~161, 1928』）は、この様に館界
で標準分類表が渴仰されている時に、折よく公表
されたものである。

森はわが国に標準分類表がなければならぬ諸点
をとりあげている。当時は過去50年間に生まれた
わが国の図書館は、ほとんど基準とすべき軌道の上
に経営されてはいない。そのため各館は、個々の
設立者もしくは経営者のもっている主観的立場
から、経営は自由勝手に計画され、そして実施さ
れているのが現状である。

そのために、「今ヤ 5000 ノ図 5000 種ノ経営上
ニヨッテ居ル」、この結果、A の図書館に出入し
そこでの経営方針をよく会得したところのユーザ
ーが、たまたま他の B 館へ行ったとする。その際
には、「初心者ト同様ノ立場ニオカレテ、既ニ得
タ知識ハ殆ドナンラ役ニタナナイ」ものとなっ
てしまう。

さらに、元来図書館ほど、各館で共通性をいろ
いろな面で持って貰いたいものはないのが実情で
ある。従ってゆくゆくは、各館の相互相助を活発

にし、やがては「Inter loan system ニマデ進マナ
ケレバナラヌヨウ運命付ケラレテイルニモ不拘、
各独立シタル体系デ、即チ極論ズルナレバ、排他
的組織ノ上ニ立脚シテ居タノデハ、到底此ノ理想
ノ実現ハ愚カ、今日既ニ目錄ノ交換ニヨル、彼此
相互的便宜ヲ計ルコトサエ手輕ニハ行エナイ状態」
になってしまおうとしている。

この事情は、ただ単に利用者側だけの問題にと
どまらない。図書館従事者についても言えること
である。館員がかりにA館からB館へ移動したと
する。上記と全く同様な結果を生むということに
なってしまう。

「人物経済ハ勿論ノコト、従業員モ或一ケ所ニ
精通シタ者ト雖ドモ、他ニ道ヲ求メルノガ憶効」
(團研究 Vol. 1) となってしまう、結局は、「馴
レタ処デ不満足ナガラ落付カネバナラナイ」(ibid.)
ような状態になってしまう。そこで、そのために
今日までに分類表については、標準分類表となす
べきものを種々考究して来たのであるが、それら
の殆んどすべてが共通的でなく、個々の利便を主
として構成されている観があると言える。

わが国では、帝国図書館分類表が、比較的早期
に制定された。かなりの利用者もあったわけであ
るが、今日では、「ソレニ含マレテイル標目ノ不
足ト、記号ノ複雑ト理論的展開ノ上ニ、色々ナ障
害ガ伴ウ結果、新シイ圖デハ余リ歓迎サレナクナ
ッタ様デアル」(團研究 Vol. 12) としている。

(実はこの帝国図書館の八門分類にも各種の欠点
もあり、余り芳しくなかったようである。)

米国の事情は、「Cutter 氏ノ創案ニナル Expan-
sive Classification ガアリ、アメリカ議員團分類
表ガアリ、又イギリスニハ Brown ノ Subject
classification ナドガアツテ」(ibid. Vol. 1) 図
書館の種類・目的により、適当なものを選択利用
している。しかし、これらのいずれもが「我国文
献ノ整理ニ其^{そのまま}當^ま筈^はメ難イ」従って切角の好材料
即ち D.C.、E.C.、L.C.、S.C. など「即効的役
ニハ立タナイ」(ibid. Vol. 1) としている。

わが国でも、十進分類 Decimal Classification
形式をとって作られた分類表はかなり多い。しか
しそれらはただ外観だけの便宜、すなわち十進記
号だけを適用するものであって、「D.C. ノ根本タ
ル助記的精神ヲ汲マナイ似テ非ナルモノデアツテ、

所謂「似而非」十進分類表ト云ウベキモノ」であ
る (ibid. Vol. 1)。なお Dewey 分類表は、「ソ
レニ相關索引ヲ付セルコトニ依リテ、利用効果が
増大」しているわけである。しかし我が国の分類
表では、殆んどが分類体系だけで、索引を伴って
いない。そのため、扱う人が変わるたびに、また同
一扱者でも、時によっては甲乙置籍場処を異にし
たような不便さを来している。であるからして、
分類にはなるべく詳細な索引の必要性が叫ばれる。

分類記号法についても、従来行われたものにア
ラビア数字だけ、ローマ文字或は数字と文字の組
合せなどある中で、「数字専用ノ代表的ナモノハ
Dewey Decimal」そして文字だけなのは「Cutter
ノ Expansive」また「兩者併用ノモノニハ Con-
gress 及ビ Brown, Subject ナドガアル」(ibid.)、
としている。

当時の分類学者達にとっては、元来、分類はす
べて数学・文字併用が最適であるという方向へ向
っていたようであった。しかし彼の発表したものは、
一般図書館用の立場に立って立案したものである。
その目的を達成する点からみれば、記号は
「最モ記憶シ易ク、且ツ世界的共通符号デアル数
字専用ノモノ」(ibid.) であるとする。かくして、
「基本項目」、「第一要目表」、「細目表」、「助
記表」などをあわせて発表した。(ibid. 團研究
Vol. 1)、分類表案はひとまずまとまったのであつ
た。

当時の事情についてよく述べているところの、
「N.D.C. 日本十進分類法 第7版」は、その版の
序説のところで分類表の説明をしている。即ち、
N.D.C. の生い立ちについて述べ、「はじめ『和
漢共用十進分類表案』の標題で、團研究に当時の
会員である森清が発表し、それを翌年『日本十進
分類法』と改題して、間宮不二雄の手で刊行され
たのである。素案は総表が僅かに3ページであり、
索引が350項目という簡略なものであつた。しか
しながら十進法のしくみが、十分生かされている
点において、まだ索引が附せられているなど、わ
が国における分類法としてはまさに画期的なものと
言えよう。」(日本十進分類法 N.D.C. 第七版
序説 P. 11)、と高い評価を与えているのである。

この日本十進分類法 N.D.C. は実は記号法とし
ては、米国の Mevil Dewey の手になる十進分類

法 D.C. (D.D.C.) に従っている。そして、主題の配列順位については、デューイの十進分類法 D.C. よりも、理論的にすぐれた Charles Ammi Cutter の展開分類法 Cutter's Expansive classification, E.C. によっているのである。したがってこれは L.C. とも近いものであると言えよう。網以下の区分については、D.C.、L.C. その他多くの分類を参考にして成った (N.D.C. の第 7 版 序説「分類表の説明」の中、P. 12 に記述されている。) ものであるとされている。

D.C. を採用するというのは、当時としてみれば世界的傾向であった。これにあえて抗した姿勢をとった N.D.C. の支持者、及び従来国内での分類の主観化を相互に指摘しながらも、とうていそこから脱皮することが出来なくて、苦悩していたわが国の図書館界、これらの双方から、これを改善しようとする声が出たのは、首肯されるところと言えるであろう。

二、N.D.C. 育成への L.Y.L. の努力

青年図書館員聯盟会報 L.Y.L. Bulletin 6th year. P. 9 によれば、昭和 8 年 9 月 2 日、L.Y.L. の理事会 (第 9 回) において、N.D.C. 調査委員会設置 (仙田理事の提案) の議案が提出され審議された。

そこでは、N.D.C. は L.Y.L. が支持して普及を計っており、従って事実上聯盟公認の「図書分類表」でもあるのである。しかし、正式に公認をうけたものではない。従ってこの委員会の名称は N.D.C. 「研究委員会」と呼称を改めた。そして委員 10 名以内、人選は本部一任 (同会報の 6th year によれば、条件として「委員中に編者としての森氏と熱心なる利用者として加藤氏、仙田氏はぜひ入れること」としている。) と決定したのであった。

同第十回理事会では、N.D.C. 研究委員会の委員として森清以下 10 名——岡田健蔵 (北海道)、佐藤膳雄 (東北)、加藤宗厚 (関東)、村上清造 (北陸)、目黒加一 (近畿)、横井時重 (近畿)、堀口貞子 (南海)、神津武夫 (山陽)、森清 (山陰)、多田光 (四国)、以上の 10 名——に委嘱状を出すこと、及び振興策は来会者の意見により、

実行可能な面から漸次着手すること、出版法に対しては、不日、本部から内務省へ提出することなどが決定された。

よって、10 月 20 日 L.Y.L. 理事員の中島猶次郎名をもって、委員候補者に委嘱依頼状の発送が成された。文面の中に、「(1) N.D.C. 研究会組織及方法、(2) 右研究会ニ対スル御希望、及び御気附 1 点」が加えられたのであった。

N.D.C. を購入した先に対する案内状 (ibid. Bulletin 7th year PP. 9 - 10) も発送された。それには、「日本十進分類法研究会」が、青年團員聯盟内に設立されたことを報じている。さらに、「(1) 同法中改良スベキ事項及細目ノ展開、(2) 同法実施上ニ対スル疑問ノ相談、(3) 其他同法ニ関スル一切ノ件」などを調査し、同法をして益々社会の進運に伴わしめる。それと同時に、同書の改版の参考に資し、併せて同法の実施を容易にし、且つ N.D.C. 分類を採用した図書館の相談所とする。またそれら図書館相互の連絡にも資する等々という諸目的をめざして、すぐ実行に移されるようにしたのでご協力、ご利用をいただきたいと呼びかける。

そして、「今後日本十進分類法中、改良改正スベキ点、細目分類表ノ御希望并ビニ同法ノ實際利用上ニ対スル疑問、又ワ御意見及同法ニ関シ御気付ノ事ヲ細大トナク……御通告下サイマスレバ同研究会ニ於ケル研究対象トナシ、御希望ニヨリテワ、直接御回答モ申上ル筈……今後共……御支援ニヨツテ同法オシテ更ニ一段ト完全ナモノニ仕上ゲテ参リタイ」 (L.Y.L. Bulletin 7th year.) としている。

さらに日本十進分類法 N.D.C. に対する、訂正、追加の件が議せられた。昭和 9 年 3 月、N.D.C. 研究委員会消息によれば、「森清氏ノ手ニヨツテ作ラレタ私案『日本十進分類法使用者手引：其 1』及『010 圏学ノ分類ノ訂正・展開細目表案』が各委員間に配附された。そしてまた特に、N.D.C. 100 類の精神科学 (哲学・宗教) の所に対する会員の意見が広く問われたのであった。

昭和 9 年 4 月、L.Y.L. Bulletin によれば、N.D.C. 研究委員会の手になる 0 類の最終案が決定した。よって團研究 Vol. 7 に掲載し、第 1 類の研究案が森委員の手になり、各委員配布となった。さら

に、N.D.C. 研究委員会提出の「日本十進分類法」次版改訂案第2回が、*図研究* Vol. 7 に発表された。

L.Y.L. Bulletin 8th year によれば、N.D.C. 委員会報告では、第3版を至急発行する必要が生じた。よって、森清の手による総表0類から2類まで及び農学部関係が2月10日に審議された。残りは2月16日夜10時までかかって検討し、それでも確定不可能な数ヶ所は編纂者森清に一任して、ひとまず全表を終ること、及びN.D.C. 第3版は、遅くとも本年4月末には発行の予定である等と報告されている。

昭和10年5月、L.Y.L. Bulletin 8th year (P. 38) によれば、N.D.C. 刊行以来7ヶ年、3回改訂、増補第3版完成ももう旬日を出ない筈である。さらにまたL.Y.L. がN.D.C. を公認した点、及び推薦しつつあることをも報ずる。そして、さらには「総会ヤ大会等デ統一ヲ希望スル百ノ議決モ、一ツノ実行ニハ如カザルコトヲ如実ニ示シ」たと述べているのである。

なお愉快なるニュースとして、四国大会では、「四国四県にオケル圖ノ分類法ヲ日本十進分類法(森清編)ニ統一ノ件」が上提されたこと、及びこれは恐らく数年前に旧分類による数万の蔵書をN.D.C. に改めた〇〇図書館からの提案であろうとしている。また8万を所蔵する神戸市立図書館がN.D.C. 化する事になって、着々進行中である。これらN.D.C. への協力に対しL.Y.L. から大いに感謝するとも報じている。

また、コード作製についても、N.D.C. 研究委員会関係報告として、第3版も発表済みなので目下そのコードを森清氏が立案作成中である。「コノ完成ハN.D.C. ノ普及化ノ上ニ拍車ヲ加エルモノ」として、コード作成を述べる。

L.Y.L. Bulletin 10th year P. 18 によれば、N.D.C. 研究委員会は所期の目的を遂行したので、委員会を一応廃止する。将来必要に応じ再建も考慮しているということとなった。

富士、神津、加藤、目黒、森、村上、岡田、多田、仙田等で組織するN.D.C. 研究委員会も、大きい成果を得て解散を見た。そして各委員に対して、L.Y.L. の理事員首席から謝状が発せられたのであった。

「第11回総会報告の件」が、昭和12年8月、L.Y.L. Bulletin 10th year に報告された。他の三委員会即ち、(1)仮名問題常置委員会、(2)基本的参考図書編纂委員会、(3)協会案目録法委員会等と共に、N.D.C. 研究委員会にあっては、一応その目的を達成したので廃止する旨が掲載されている。

「兵庫県ノN.D.C.」についても、また会報に紹介されている。(L.Y.L. Bulletin 9th year P. 12)

三、N. D. C. への協力と成果

多くの協力が、N.D.C. によせられている。まず村上清造の、「N.D.C. 494『薬学』ノ‘分目’変更及展開細目表案其ノ他ニツイテ」(L.Y.L. *図研究* Vol. 3)がある。学校図書館協議会薬学専門部会で昨年賛成を得たものを、N.D.C. の編者である森清の意見を参考にして、改訂展開したものである。

シラキウス大学の電気工学部卒で、General Electric Co. に就職していた渋谷市郎が、骨子案をつくり編者森清が、これに基づき按配して作成したものが、「N.D.C. 540電気工学及電気工業細目展開案」である。これが、*図研究* Vol. 3 に公表された。

「N.D.C. 化学及衛生ノ部展開細目案 N.D.C.、430 化学、499 衛生学、519 衛生及都市工業、570 化学工業ノ部」(ibid. Vol. 3)、及び柳二郎の、「N.D.C. 221 満洲ノ地理区分改訂私案附：満洲地方記号索引」(ibid. Vol. 16)等も見られる。

「N.D.C. 490医学綱展開細目案(1)」及び「同細目案(2)」は京都医大の赤昇軍次郎氏の好意により同大教授数名の校閲を得、また多くの助言をえて発表(ibid. Vol. 9)されたとする。

森氏の、「N.D.C. 770演劇ノ部展開細目案」も再版では「目」までしか掲げなかったものを、さらに進めて、発表(ibid. Vol. 5)している。

以上からすると、森清を中心として、村上、柳をはじめ多くのL.Y.L. 会員及び、L.Y.L. とは直接には無関係と見られる渋谷市郎、その他大学薬学部会や医学部の教授などの力強い、しかも高質な協力を得ているように見受けられる。

このようにして、「日本十進分類法」次版改訂

案が、昭和9年「図研究」(Vol. 7)に掲載された。森清はそのマエガキの中で次のように述べる。

「『日本十進分類法』ヲ世ニ問フテカラ約5年トナリ、現在デハコレニ採用スルモノ中央圖トシテ4館(青森、福島、鳥取、徳島)ソノ他香川県立、天理、函館市立等、公共圖ヲハジメ、大学・専門学校・師範・中小学校圖等ニ亘リ、ソノ数100館余ニ及ブ由デアル。マタ諸種ノ文献目録ニモ可也使用サレテキタ」とある。これは「欠点ノヨリ少ナイ N.D.C. ガ採用サレタ」ことであって、「N.D.C. が標準分類法トシテ優秀デアルコトヲ物語ッテイルトイウケデハナイ」と特にことわっている。この自省の姿こそが、N.D.C. の大成を許したのではないかと思われる。

さらに、「N.D.C. ノ『産業組合』分類ノート考察」(ibid. Vol. 6)が目黒加一により、また徳川宗子の「日本十進分類法ニオケルクラスノ配当ニツイテ」(ibid. Vol. 8)なども見受けられるのである。

かくて、「図書分類ノ普遍化常識化」(ibid. Vol. 15. PP. 103~106)が、文部省教学局長官、社会教育局長、日本出版文化協会会長等あてに出されたのであった。そしてその中にあって、「分類法ハ現在全国ニ最モ普及利用セラレツツアル森清編『日本十進分類法』(大阪間宮商店発売)ヲ以テ最適ト認メ、茲ニ御推薦申上候」と紹介推薦する。そして更には、上記の文部省教学局、社会教育局および日本出版文化協会の三ヶ所から、発売される推薦図書に対しては、この「日本十進分類法」による分類番号を附して発表するのが適当であると述べている。森清のN.D.C. を後援し、専門委員会でさらに高める努力を払ってのL.Y.L.とすれば、この言葉は当然の声と言ってよいであろう。

伊木武雄の「N.D.C.ヲ見ル——修正私見ヲ併セテ」は、N.D.C.の誕生を礼賛しながらも、「N.D.C.ニ望ム修正私見」(ibid. Vol. 3)を忘れずに加えているのである。

四、N. D. C. に対する批判

1. 国内における N. D. C. 批判

森清のこの日本十進分類法の出現は、当時のわ

が国の図書館界にとっては、L.Y.L.の機関誌「図研究」Vol. 6の「N.D.C.ニ対スル諸批評ニ就イテ」に述べられているように、まさに「大旱ノ雲霓」であつたようである。

「図研究」では、「新設圖ハモトヨリ相当成長シタ圖デサエ争ッテコレヲ採用シ」て行つた。従つてN.D.C.を既に使用している図書館の館数は、「六十余ニ及ブトユウ」と紹介されている。

館界では、識者の関心が甚だ高揚されて行つた事は確かである。多くの発言がそこに見られることから知られよう。我が国の館界の名門である芸草会の機関誌「図書館研究」の第9巻第1号(昭7.12)は、紙幅の殆んど大部分をあけて、この新しく現れたN.D.C.に対しての批評の筆陣を張っている。この点からこの間の容易ならざる事情が推察されるというものである。

まず、「『日本十進分類法』を評す」を高田定吉がかかげている。蔵書百萬足らずの圖においては、補助記号が不要であるとの命題を述べている。ついで弥吉光長は、「日本十進分類法を打診す」を、そして波多野賢一も「日本十進分類法を評す」を述べている。と・たまも「日本十進分類法の考察」、高橋生の「日本十進分類法一私見」などが見られる。これらからその関心の非常に高度化されている点が伺い知られよう。

これら諸論文は、芸草会の関係者をはじめ、わが国の図書館界全般が、いかに分類法に関心をよせて、しかもすぐれた分類法の出現を望んでいたのかを知るに好都合なものである。

森清のN.D.C.をとり上げて、研究会でこれによりよいものにしようとなつたL.Y.L.にとってはN.D.C.に対する国内事情、とくにN.D.C.の批判には直ちに敏感に反応しているのが見られる。

N.D.C.を批判する諸論文に対する、L.Y.L.側の反響は機関誌「図研究」(Vol. 6)に掲載されている。「N.D.C.ニ対スル最近ノ諸批評ニ就イテ」に見られる。その内容には相当激しく厳しい調子が伺える。しかしながら、このような論議のやりとりを重ねること自体が、わが国の館界にとり喜ばしい事であつたと言えよう。

L.Y.L.側の論は短いものではあつたが、多くの示唆を館界に与えている。まず、N.D.C.には、細

密に検討すれば、将来の改善にまつ多くの欠点がある。しかし同時代の国内のどんな分類表よりも、より多く標準分類表の条件を具有している。しかもこの N.D.C. を使用している図書館はといえば、他のどのような即成の分類表よりも、より多くの利益が享受できている。

しかも、その上に、幸運にもこの N.D.C. の編者が健在である。しかも春秋に富んでいる点など考えるとこの分類表は、絶えざる醇化と精錬とが約束されたものと言える。「ワレラガアエテコレヲ推奨スルノワ、ユウマデモナクコレガタメ」であるとしている。

L.Y.L. の立場とすれば、以上の事由からして、真に斯業の将来を憂うる者にとっては、以下の二道しかとる手がないのではないかとする。それは即ち、N.D.C. に優る具体的な対策を提供するか、それともそうでなければ、N.D.C. の改善に協力するか、この二途あるのみではないか、としている。

しかもさらに、もしも「徒ラニ初心者ヲ惑ワスヨウナ言説を恣ニスル者」があるとなれば、それは、「ヤガテ自ラノ墓穴ヲ堀ル」ことであろう。とまで論及してその立場を明確に述べている。

このような反論からして、L.Y.L. 側の自信のほどが、伺いえられよう。そして、この N.D.C. を生み、しかも更にこれを立派に育てようとする熱意と、見通しの上に立つ確信とが、実は当時の図書館界には欠けていたものであった。そしてそれは長く識者から渴仰されていたものでもあったと言えよう。

^{すずきまさち} 鈴木賢祐は、「Dewey 十進分類法ト Borden 案附言」の中で、森清の N.D.C. に対して言及している。森氏の力作を前にして、先づ氏のわが園界のために払われた労に対して、敬意を払うものであるとする。さらに、N.D.C. は思うに、従来試みられた類似のものの中で、「最モヨク十進分類法ノ精神ヲ汲ンダ、随ツテ、十進的全日本分類表トシテハ、最モ進歩シタモノ」と賞讃している。N.D.C. 序説の説明と合せて、正当な評と解することができるであろう。

2. N. D. C. に対する国外からの批判

日本十進分類表に対しての、国外からの反響も大きいものがある。それは、デューイ十進分類法

D.C. の側からの強力な批判と説得となって、直接 N.D.C. 側に与えられていることから知られる。

全く予測した通りに、D.C. 側から、D.C. の editor として活躍している Dorkas Fellows 女史から、「改変十進分類法に対する抗議」となって実現したのであった。

この、「A protest against devised D. C. System. Dorkas Fellows, editor of "The Decimal Classification."」の中で、Dorkas Fellows 女史は強力に N.D.C. の非を指摘する。即ち、D.C. の第12版で、特に日本語学 Japanese filology に特定番号 Specific number 495.6 が配当してある。したがって、これに対応するところの(日本)文学 (Japanese Literature) に特定番号 Corresponding number を与えることにすれば、895.6 であろうと説く。そこで既にこのような基礎記号 basic numbers が与えられた以上、421 - 428, 821 - 828 の場のように、1 から 8 までの形式区分 form division が応用できるのではないか。もしそれが出来ないというならば、その理由は何であるのか。とあたかも、詰問とも思われるような調子で批判してきている。

3. D.C. 側からの抗議に対する N.D.C. 側の回答

デューイ十進分類法の editor である Dorkas Fellows 女史の厳しい抗議に対して、N.D.C. 側の意見がまとめられた。そして、鈴木賢祐を代表として、「日本十進分類法ノ立場——Dorkas Fellows 女史ノ「改変十進分類法ニ対スル抗議」ニ対シテ——」が回答されたのであった。

その中では、論はまず D.C. の現状批判からすめられている。D.C. がその発生以来五十余年の間に、知識の体系とある部分では乖離し、ある部分では交錯し、それについてその実用性が著しく減殺されて来たことは、今日では定説であると指摘する。

そして D.C. 分類に比較して、議員団分類法の方がさらに優れているという、リチャードソン Richardson の言葉をまずとり上げる。ついで D.C. については欠点が沢山ある。その範疇の多数が知識の諸分科を網羅するには、余りにも陳腐ではないかと、D.C. を評する Sayers をもとり上げる。また、さらには、Van Hoesen の「われわれは、

新しい D.C. を待望する」、等々の諸説をもとり上げて参考にし、論をすすめる。

また、問題を D.C. 体系の時代的価値に関する方面からも検討する。そして、さらに D.C. の地方的価値の方面からも見る。その上日本文学や日本語学についての D.C. 側の扱いに対して論を進める。

日本文学及び日本語学に対する形式区分の応用については、Dorkas Fellows 女史の意見に対して、お説の通りであると肯定する。どうして女史の説を実践できない筈があろうかと一応述べる。そして、「日本の図書館にとって、不利不便であるというだけ」であるとして、Dewey の D.C. 分類が、わが国の図書館で利用する際の、宿命的な不合理性を指摘している。

帝国図書館の実情を例にとり、具体的にその不合理性につき説明を加えている。この点については、実は Dewey が D.C. 創設をした精神にもとるものであるとする立場からの論であると言えよう。同時に、第三者に対しての説得力も見出すことができる。格調の高いものと評しえられる。

4. 日本十進分類規程及び解説と N.D.C. の標準

N.D.C. を中心とした、分類規定及び解説については、加藤宗厚、福士貞子等があげられる。加藤の、「分類規定試案」は「図書館雑誌」に掲載されている。また福士の、「私の N.D.C. ノート(1)」が、L.Y.L. の 園研究 Vol. 5 にのり、詳細な解説がなされている。

また、編者である森清は、「N.D.C. 分類手引案」を 園研究 Vol. 10 に掲載している。そこでは、N.D.C. に対する分類規程並に解説をし、分類名辞項目の意義及びその範囲を、さらに引きつづいて個々の場合での分類例の指示を与えている。しかも結論は、後日発表する点を約束している。N.D.C. に対して、編者の義務的作業であるとも見られる。

「十進分類ノ段階ニ対スル称呼ノ統一」が、園研究 Vol. 3 及び、L.Y.L. Bulletin 2nd year に発表され、第 1 段以下 8 段まで、類・綱・目……との称呼統一を図ろうとしている。この点、中華民国図書館協会においても、同協会発行の雑誌上に紹介している点も紹介している。称呼統一は、とかく看過され勝ちであろうが、等閑視しえられ

ないものと言えよう。

^{ただひかる}多田光は、園研究 Vol. 6 に、「光慶園分類法ノ変更ニヨリ N.D.C. ノ批判ニ及ブ」をよせている。徳島県立光慶図書館で、過去 3 年余にわたる準備と、約 1 カ月間にわたる休館をし、この間全館員 13 名の手で作業を進め、光慶分類法から N.D.C. への変更を果たした経験を述べて紹介をしている。

多田はその中で、当時（昭和 4 - 5 年）発表された標準分類法の、乙部式・毛利式・N.D.C.・日比谷の四者の中で、とくに N.D.C. はそのすぐれた助記法、及び分類の各項目の組織的排列などの故に選ばれたとしている。

^{よしかわよそはち}横川四十八の「森清君ニ呈ス」（園研究 Vol. 13）も、N.D.C. 第 4 版利用の便を述べ、特に自分の蔵書 1700 巻を、N.D.C. により分類整理した際の経験から、質疑をはかっている。

村上清造も、「富山県ニオケル N.D.C. 園ノ造成」（園研究 Vol. 15）の中で、富山の中央園の、N.D.C. 図書館の造成への努力を中心に述べ、N.D.C. が標準分類として適当か不適当かを、小田原評定的に議論しているのは、暇人の仕事である。現実には、N.D.C. を採用する以外、我等の工作を助けるものはない、としている。

青年園員聯盟 L.Y.L. 本部が、文部省教学局長官、文部省社会教育局長、日本出版文化協会々長などに当たって、「図書分類ノ普遍化・常識化」がある。日本十進分類法・日本件名標目表・日本目録規則等の図書館整理の三つの tool、いわゆる「三大園ツール」完成を、L.Y.L. の創業以来 15 年間の努力の継続のためとした。また「三大トウル完成ヲ報ズル」の朗報。さらには、既述の村上の「富山県ニオケル N.D.C. 園ノ造成」等々。ひとしく L.Y.L. の労苦に対する歓喜と、その成果に対する大きな自信を示すものでもあったのである。

このような L.Y.L. の全面的協力のもとに、森清の労作は一層偉力を示した。森は、当初 N.D.C. を標準体系へのいわゆる導火線として、提案したものであったのである。しかし、これが時を経ていたこともあり、L.Y.L. の第 8 回総会において幸運にも公認されるに至った。そして、昭和 12 年 N.D.C. 第 3 版の序文の中に見られるように、これが、全国百余の図書館へ普及して行ったのであった。このようにして、N.D.C. は標準分類表とし

ての色彩を、ますます強化して行ったのである。

N.D.C.は、そのような状況下で、第1版を1928年に出版して以来、総頁数201P. A5版、増訂2版(1931)、294P. A5版、増訂3版(1935)304P. A5版、増訂4版(1939)328P. A5版、増訂5版(1942)325P. A5版、1942増刷(同縮刷版1947~8(毎年)6-8版B6判)と、版を重ねて量・質とも充実して行ったのである。

かくして、N.D.C.は日本目録規則N.C.R.、日本件名標目表N.S.H.(のちB.S.H.基本件名標目表)と共に、わが国の整理を辞書体目録の方向へ誘導して行くことのできる「図書整理の三大ツール」と称賛されるに至った。L.Y.L.は他の図書館員研究グループと共に、この歴史的な成果を残す役を果たしたのであった。

IV 図書館資料の整理 - 分類

図書館が多数の市民、ひいては国民全般に奉仕し、その生活と連関して重要な活動を重ねている。しかもそれが広範で効率的であることから、時に「市民の大学」とまで呼ばれている。広く各層の市民を対象として、教育効果をあげているからである。

このことから、図書館教育の成否が国の文化に大きくかわると言われる所以が生ずる。国家的規模での大きな課題とも言えよう。この任に当たる図書館はこの間の事情を認知し、古来多くの研究が進められて来た。その成果と、図書館的toolの開発とが見られる。

今日、図書館は常にユーザーのための存在である事が確認されている。しかも館資料の精選と、整理のtoolの標準化とが不可欠なことも承認されるところである。しかし昭和初期のわが国では、このような実情にはほど遠いものがあった。

多くの種類の図書館のすべてが、初期の目的をはたすためには、いずれの図書館を見ても、資料が使い易く、しかも管理し易く整理されている事が肝要である。これあってこそ、図書館の利用案内も、レファレンス・ワークも利用も、充分にな

されうるものであるからである。

このように見れば、図書館資料の整理は館にとって不可欠な基礎的要件とも言えよう。しかも、そのうちでも資料の分類は、さらに重要なものとも言えよう。

わが国の図書館の発展は、これを巨視的に見れば、長期間にわたっての国民の大きなエネルギーによりなっているとも言えよう。昭和初年に及びその館数が約3,000を数えるところからして、発展への努力には見るべきものがあるとも言えよう。そして、この動きを増幅するのに好適な朗報がもたらされた。御大典を記念して文部省が企画した、わが国の図書館の倍增運動である。このことは国民にとっても、図書館関係者にとっても歓迎すべき朗報であった。

一方、当時の図書館関係者自身にとって、早急に解決を要する課題を多く持っていた。その内の一は、図書館の規模が余りにも小さく可急の速かにそれを拡大すべき事であった。その二は、図書館の質的な面の充実という点である。

中でも後者は、わが国の館界の長期的にわたって、未解決になっている課題であった。それは、未解決の上に、年々のびのびになって、積み残しの課題であった。そして、その中でも最も重要なものが、図書館の質的发展に関する課題であったのである。そして、ここに、それが世論の刺激を受けて顕在化したのである。

この事は、館界に身を置く者にとっては、一見その面目にかかわるものと見られる。しかし、視野を拡大して考えれば、館界にとって、或は好運であったとも言えよう。

それは、当時、関東大震災により大打撃を蒙った図書館界が、ようやく立ち直り清新の気を取り戻した時期でもあった。加うるに皇室の慶事で、人心の図書館に対する関心が高揚された時でもあった。

しかも、図書館設置に熱心であった館界が、その群小の図書館の規模の弱小に気づき、より拡大に向おうとする面と、同時に質の面に力をそそぐとする傾向を見せて来た折であった。館界自身が発展の鋭先を転換しようとして、手もとを凝視することになった好機を得た時であった。

さらに、諸外国での図書館学の発展も目ざまし

く、それら研究資料の輸入と蓄積が図られ研究者の期待に答えられるようになった。年若い館員の図書館学研究への意欲の高揚もこれに伴って行った。そして、ここに、図書館のフロンティアが形成されようとしていた。

文化、学術、政治の中心地である東京を中心とする関東の大震災が突如勃発した。これによって関西、わけても大阪に館界がその機能を移転させざるをえなかった。しかしそれが復興により、再び東京復帰がかない、活動開始となったのが、予想外に早期であった。

大毎がその頃、世論をバックに、図書館教育の指摘を行ったのであった。これが、わが図書館界にとって、結果的には図書館的フロンティア形成への響鐘となった。そしてまた、図書館の質の高度な図書館づくりの契機となる提言ともなった。従って、そこに館界自身の力強い自覚を忘れてはならない。

世論の同意を館界として得るのは容易であった。と同時に、関係者にとっても有意義な提言であったとも言えよう。幸にも、館界の内部に、この課題に正面切ってとり組もうとする若い図書館員達の研究が生まれた。これは注目されてよい。地道に海外の図書館学の研究から開始された。

そして、わが国の図書館事態によく合致した開発が持たれた。それらの中から、分類についての広範にわたる研究が生まれた。そして、その成果が持たれた。乙部式・毛利式・N.D.C.・日比谷式等であり、その中森清の手になる日本十進分類法 N.D.C. が^{ほんめい}奔命になったのである。

森の N.D.C. は小規模なものとして発表された。それは海外での分類を、充分にとり入れられたものであった。その質的にすぐれたものと、多くの人々の批判を伴った努力もあって、漸次発表して行き標準分類表としての力を持つに至った。これは幸運であった。関係者の^{じんしん}真摯な態度と倦まざる努力と協力的研究等の賜とでも言えよう。

N.D.C. の完成は、ただ単に分類法の標準化としての成果にとどまらない。協力的研究成果は、次々と他のツールの開発の機運をうながし、それらの標準化を一気に進めることとなった。

またさらに指摘できるのは、わが国の図書館資料の整理とくに分類は、単に分類づくりの作業や次の tool 開発に影響しただけではなかった。広く図書館づくりを推進する契機ともなった。また多数の館員の協力は図書館学研究に大きなはずみをつける事ともなった。

それは同時に、協同研究の方法のパターンが成立したとも言えよう。協力研究によるエネルギーの集約が、日本目録規則 Nippon Cataloging Rule N.C.R. や日本件名標目表 Nippon Subject Heading N.S.H. などの開発に対して、貴重な体験となって活用されたのであった。これは、さらに戦後のわが国の館界発展のため立派な遺産となったとも言えるであろう。

大毎を中心としての世論の指摘は当面整理 tool の一つである分類法に集中しているかの如くであった。しかし、さらに、図書館教育が国民生活に密着し、庶民にとっての大学の役をはたすことへの願望も、根強くそこに表現されていたのであった。この事は忘れてはならない点である。

注

1. 加藤宗厚、第一回日米大学図書館会議（昭44）報告論文集、第一部 PP. 24～5、及び、加藤宗厚著「図書分類法要説 PP. 155～6」に説明。はじめ八門、明治 42.8 分合して十門、これに 000～999 の記号を与えたとしている。
2. 清水正男、日本読書学会機関誌「読書科学」（昭44）「L.Y.L. とよみの場について」
3. 1900-1901 The New York State Library School Association Alumni Lecture で試みた講義案を集録した著書。
4. D.C.総編輯者 Miss Dorkas Fellows よりの依頼による Mevil Dewey の伝記についての原稿依頼によるもの。
5. 当時米国では 17 館が、英国でも 8 館が、分類に L.C. を使用している。
6. L.Y.L. 「図研究」Vol. 1 P. 121